

津金澤教授・松本教授・西川教授のご退任にあたって

北 川 紀 男

社会学部および大学院社会学研究科の教育・研究に永らくご尽力下さった津金澤聡廣教授，松本眞一教授，西川一廉教授が，本年3月末をもってご退任されることになった。それぞれ事情は異なるけれども，無事にご定年を迎えられたことはお慶び申し上げるべきことなのかも知れないが，お送りする我々にとっては淋しいかぎりである。

思いかえせば，津金澤先生には，悲願だった大学院社会学研究科の設置に際して，欠くことのできない設置要員として，当時ご在職中だった関西学院大学社会学部教授の定年を待たずに，2000年4月に本学にご就任いただいた。大学・大学院での教育・研究に造詣の深い先生には，学部教育はもちろんのこと，開設間もない大学院の運営について何かとご相談してアドバイスをいただいたことが思い出される。温厚な先生ではあるが，研究者・教育者としての毅然たる姿勢を貫かれ，社会学研究科の進むべき道をお示しいただいた。その後，大学院社会学研究科長をお引き受けいただき，任期満了とともに70歳の一般定年をお迎えになり一旦ご退任になったのだが，大学院設置時の特例により，改めて特任教授にご就任いただき今日にいたり，今年度末をもって特任教授定年をお迎えになった次第である。先生は，日本新聞学会や日本コミュニケーション学会の重鎮であられ，学部では「マスコミュニケーション論Ⅱ」を，大学院では「広報社会学研究」や演習をご担当いただいた。先生の研究分野は大衆芸術・娯楽研究（娯楽ジャーナリズム），マス・メディア史研究，新聞社の社会事業文化史など多岐に及んでいる。その研究は，毎

日放送でのジャーナリストとしての経験を踏まえた精力的な調査・取材活動や文献渉猟に基づく労作であり、本学就任以降にかぎってみても、資料的価値の極めて大きい『「外国の新聞と雑誌」に見る海外論調』（復刻、全10巻）『戦後日本のメディア・イベント』『村嶋歸之著作集』（全5巻）『写真でよむ昭和モダンの風景』などの大作の編纂に努められ、われわれ後進にとって貴重な財産となっている。また、先生は、日本マスコミュニケーション学会や日本広報学会の理事としてのご活躍に加えて、財団法人山村育英会理事長、(株)スペースビジョンネットワーク番組審議会委員長、郵政省・近畿地区デジタル問題懇談会委員を歴任され、新聞や雑誌などのメディアを通じて多くの発言をなされてきている。

松本先生が、神戸・大阪家庭裁判所、県立広島女子大学、大阪府立大学を経て本学社会学部教授にご就任下さったのは1989年のことである。まだ北野田キャンパス時代で社会学部は社会学科1学科の時代であり、転出された野々山久也教授（現甲南大学教授）の後任として社会学科にご就任いただいた。当時は、第2団塊世代が大学進学期を迎えており、臨時定員が設定され志願者は毎年右肩上がりが増加しており、ピーク時の1990年代初めには志願者数が4万名を超えたこともあった。しかし、急速に少子化が進行しており、中長期的には大学の将来には暗雲が漂っており、大学改組の検討が重ねられ、先生ご就任の年には文学部が開設されている（奇しくもその文学部は来年度から国際教養学部へ改組され、松本先生のご定年とともに幕を閉じることになった）。その後も大学院の開設などがなされたが、文部省（当時）は特定分野を除いて既に新規学生定員増は認めなくなっていた。そんな中で、当時の山崎春成学長から、将来構想に基づき、社会学部に新規定員を確保できる社会福祉学科を増設して欲しいとの強い要請を受け、既に準備を進めていた大学院社会学研究科の開設を先送りして新学科の開設に全力を注ぐことになった。当時、他大学では少子・高齢化を受けて社会福祉学部・学科設立のラッシュ時代で、新学科の構想の詰めもさることながら教員組織の確保が難

題で、最長老の松本先生は、上野谷加代子教授（現同志社大学教授）や村山高康教授（現法学部教授、当時社会学部長）とともに奔走され、その甲斐あって1998年4月に社会福祉学科の増設をみたのである。社会福祉学科開設に際しての松本先生のご尽力は多ししなければならない。先生の担当科目は、学部では「児童福祉論」大学院では「社会福祉学研究Ⅰ」と演習だった。先生の研究分野が児童福祉学であるのは、神戸や大阪での家庭裁判所調査官補として少年非行を扱われたご経験があるのではないかと推察するが、児童問題を広く扱われ、近年ではオーストラリア、インドネシア、タイなど東南アジアにおける児童福祉を研究され、多くの英文論文を発表されている。このことから、社会福祉学科設置や大学院構想検討の際に「国際福祉学」について熱く語られていたことを思い出す。また、『少年保護と児童福祉』『現代児童福祉概説』『現代社会福祉論』なども多数上梓されており、その業績は我々後進の範とするところである。

西川先生が本学にご就任下さったのは、まだ大学紛争のほとぼりも覚めやらぬ1978年のことである。当初から所属は社会学部であったが、当時はまだ合同教授会の時代で各学部懇談会と一般教育懇談会に別れており、先生は一般教育部会に所属され「教育心理学」と「青年心理学」をご担当されていた。しかし、その後「産業心理学」担当者の転出もあり、先生本来の専門である「産業心理学」への主担当科目変更が承認され、1990年に改めて社会学部社会学科教授にご就任いただいた。従って、先生のご担当科目は、学部では「産業心理学」、大学院では「産業問題研究Ⅲ」と演習だった。約30年に及ぶ在任期間中、一般教育部長、社会学部長、社会学研究科長の要職を歴任されご尽力をいただいたが、近年体調が十分ではなく、教育・研究とりわけ教育に自信が持てなくなったと定年を待たずに早期退職をしたいとお申し出があり、多くの同僚が慰留をしたのであるが、先生のご意志は固く本年3月をもってご退任されることになった次第である。先生は学問にも自らを厳しく律せられる方であるが、学生の教育にも毅然とした態度を貫かれ、われわれ

後進に教育・研究に対する厳しさについて多くのご教示をいただいた。産業心理学は社会学部にとって重要な科目であり、貴重な人材を失うことは残念でならない。先生には、『現代の青年心理学』や『教育心理学概論』など教育心理学や青年心理学の業績も少なくないが、ご研究の中心はやはり産業心理学分野である。学位論文となった『職務満足の心理学的研究』をはじめ『ミドルエイジの自分探し』『コミュニケーションプロセス』、また翻訳書や雑誌論文も多数にのぼり、研究業績は極めて多く後進にその範を示して下さった。その研究は、実験や調査を踏まえた実証的研究であり、先生の研究方法の手堅さに敬意を表したい。

ついで、思いつくままに先生方との思い出話を添えて、送別の饞としたい。

津金澤先生が、京都大学で師事された姫岡勤先生や清水盛光先生は、私も大阪大学の学生時代に教えを受けたことがあって共に師と仰ぐ仲であり、また大阪大学の蔵内数太先生、喜多野清一先生、森東吾先生、甲田和衛先生などを通じて本学ご就任の遙か前から存じ上げており、帰りの車中などで思い出話に花を咲かせたことを懐かしく思い出す。そのような話しのなかである時、先生が理事を務めておられた日本広報学会が話題になり加入を勧められたことがあった。この学会は、大学の研究者やジャーナリストに加えて一般企業の役職者や広報担当者が多数加入しているユニークな学会である。先生が加入を勧められたのは、社会学部にはマスコミ関係の職を希望する学生が少なくないが、彼らの就職の機会を得るためにもこの学会を通じて人脈を築いておくことは必要であろうとの意図からであった。先生の学生への思い遣りに感銘を受け、早速、同僚を誘って研究例会に参加し、先生のご紹介で加入したのだった。特任教授になられてからは、出講日が異なりお話しする機会が少なかったが、もっと教えを請うべきだったと悔やまれてならない。

松本先生は、研究分野は異なるが研究室が隣であったこともあり、よく部屋を訪ねて下さった。学部運営に関する話しもあったが、先生のお好きなゴルフが話題になり、本学教職員のゴルフ同好会におけるアンデレ杯の様子な

どを如何にも楽しそうに話して下さった。また、ある時、先生にはお子様がなく大型犬を可愛がっておられたのだが、その愛犬が鎖に絡まる事故で死んでしまった時、悲しんで涙を流されることがあった。先生の心優しいお人柄が忍ばれる。また、ご自宅の庭に実った花梨で作った果実酒を持参して下さったり、海外出張の時には煙草好きの小生に何時も珍しい煙草を持ち帰って下さった。先生とは学問分野が異なり研究の話しをすることは少なかったが、あの大きな体の独特の風貌の先生にお会いできなくなることを思うと淋しさを禁じえない。

西川先生とは、北野田キャンパス時代によくテニスをご一緒させていただいた。本学教職員からなるアンデレ・ローン・テニスクラブに所属し、まだ日の長い出講日の放課後にプレイを楽しんだり、毎年夏休みの前後に「アンデレ・ローン・テニス杯」を賭けて大会があったが、先生は優勝の常連だった。テニスの後での歓談や呑んだビールの味が忘れられない。先生は矍鑠とされておりお元気そうにお見受けしていたのだが、常勤職を続けるには体調が十分ではないと、定年を待たずに早期退職されることになりまことに残念である。また、教授会では何時も隣に座り、勤続年数の永い年寄り同士がヒソヒソと意見交換したり意気投合して納得し合い、長時間に及ぶ教授会に耐えていたが、その相棒を失うことが何よりも辛い。また、先生はオペラがお好きで造詣が深く、ビデオやDVDの録画を沢山所蔵しておられ、観劇には時間も金も厭われないと云っても過言ではない。一度、先生がよくお通いになっている「琵琶湖ホール」でオペラをご一緒しようと思いつきながら実現していないのが残念である。

津金澤先生、松本先生、西川先生、本当に永い間有難うございました。先生方のご尽力に報いるように、研究・教育に研鑽を重ね桃山学院大学の更なる発展に努める所存であります。最後になりましたが、先生方の末永いご健勝と一層のご活躍を心からお祈りいたしております。